

一九三〇年代後半には、日曜学校を卒業した二世が教師となって二世を教えるようになる。教師の講習会が開催されるようになり、教育内容や教授方法などの講習が行われる。日曜学校教師の認定証も本部から発行されるようになった。こうして二世による日曜学校が、登場したのである。一世が力をもっていたと考えられる戦前のアメリカ浄土真宗のなかで、二世が主体となって、子どもたちに仏教を教え伝えていくというかたちで、日曜学校ではひとあし早く行われていた。

新宗教教団の展開過程における「宗教境界」の更新

佐藤 洋

欧米の宗教社会学におけるセクト(Sect=少数教派)概念の基本的な性格は、世俗社会とチャーチ(Church=既成教派)に対する排他主義的な性向に求められる。こうした性向は欧米のキリスト教のセクト以外にはあまり見られないが、戦後の日本で勃興した創価学会(日蓮正宗から破門されるまで)などの一部の日蓮系新宗教の中にも比較的強い形で見られる。チャーチ・セクト論の文脈では、セクトのデノミネーション化と言うことが出来るが、この概念は、そのままでは日本の新宗教に当てはまらない。しかし、排他性の強い創価学会には妥当な概念だと考えられる。そして、新宗教教団が発展していく過程で、教団の大規模化に伴い「社会適応」を遂げるのはある種「普通」の現象である。創価学会も「言論出版妨害事件」や公明党との「政教分離」問題など、社会からの統制にに応じて「社会適応」を遂げた。

しかしながら、他の新宗教よりも比較的強い排他性を持ち、内棲宗教でもあった創価学会は、新宗教一般が持っていない問題を内包しており、他の新宗教の場合とは多少異なった運動過程を辿らざるを得ない。特に、母教団との関係・局面が重要になってくる。内棲宗教であった創価学会が社会適応を遂げようとした時、母教団がそれを受け入れない場合には、新たな対立葛藤がそこに生じるのである。

本発表では、戦後の創価学会が今日までの運動過程でどのようにその「境界」を設定・更新し社会適応を図ったのかを明らかにすることを目的とする。そこで(a)排他的教団性、(b)協調的教団性、(c)社会的宗教性、(d)母教団的宗教性、を境界の構成要素として定義した。

まず(a)はa-1「母教団の教義や宗教的源泉に基づく宗教実践・実践」a-2「他宗教や教団に対する邪宗教・謗法視」で構成されたもので、社会(他宗教一般を含む)との宗教的な信念・習俗などの乖離性を意味する。(b)はb-1「教団が行う社会・文化活動(例えば、核廃絶運動・美術展・コンサートなどの)」b-2「他宗教や教団に対する理解」で構成され、これは社会と協調する立場であり、母教団とは一種の乖離性を意味する要素である。(c)は「社会的にドミナントな価値観を理解・協調する立場」で、これは母教団(既成教団)とは異なった(それゆえ葛藤と対立の源泉となる)性向を意味する。ここでいうドミナントな価値観は、例えば正月は神社に初詣・結婚式はキリスト教・葬式は仏教などにみられる他宗教寛容観などを想定している。(d)は「社会的にドミナントな価値観から

距離をとる立場」で、母教団（既成教団）の教義や儀礼その他に基づく性向を意味する。

本研究で明らかになった点として、下記四点を挙げることが出来る。

（1）内棲教団の発展・拡大は対社会（主に他宗教）に対し、積極的に境界の設定がおこなわれる。（2）内棲教団の社会適応は対社会・母教団に対し、境界の設定がおこなわれる。しかし、それは同時に母教団との間に軌轢・葛藤を引き起こすことを意味する。これは母教団の統制を受け自由度が低く、且つ排他性の強い内棲教団の特殊性を示していると考ええる。（3）内棲教団の自立化は社会に対して以上に母教団に対する境界の設定・更新が能動的に行われる。また、母教団との軌轢・葛藤を経て自立化が進むと在家主義路線を積極的に展開する。（4）母教団とは異なるベクトルの境界を能動的に提示・更新することとは、内棲教団が社会適応と自立化を果たす上で非常に重要な意味を持つ。

アラントラ研究黎明期

飯嶋 秀治

アラントラは、オーストラリア先住民のうち、中央砂漠地帯を中心にして暮らす現在、約二千人前後の言語集団である。

本発表ではこれから発表者が焦点を当てて論じて行く四つの研究領域の最前線の主題を研究の「黎明期」として紹介していきたいと思う。

第一の最前線は、アラントラ研究の歴史的「黎明期」である。

一八九九年、スペンサーとギレンによって書かれた世界最初の民族誌と言っても過言ではない『中央オーストラリアの原住諸部族』は、西欧知識人を宗教起源論の解明に夢中にさせた（飯嶋二〇〇七）。なぜなら当時、ヘッケルとスペンサーの社会進化論が、人類のアジア起源説を採用していたからであり、それゆえに、初期の人類学者的フィールドワークもトロブリアン諸島やアンダマン諸島で行われたのであった。現在オーストラリアではこの民族誌の出版以前のギレンの日記やフィールドノート、スペンサーの写真や伝記が出版されており、歴史的「黎明期」研究の黎明期が訪れている。

第二の最前線は、そのアラントラ研究のキリスト教化研究の「黎明期」である。そもそも、スペンサーとギレンの直後、その言語の理解が疎かであると指摘し、自ら神話と慣行に関する民族誌を描いてきたのが、キリスト教ルター派のシュトレロー牧師親子であった。近代の人類学者にとって、キリスト教化したオーストラリア先住民の存在は、二次的な関心を惹くものではなく、キリスト教研究からもオーストラリア先住民のそれへの関心は周辺的なものであるため、この研究は二〇〇〇年代まで大きく遅れることになった。しかし、この百年の間、『聖書』や讃美歌、問答集の翻訳、西アラントラのプロテスタント化と、東アラントラのカソリック化、オーストラリア先住民牧師化、教会のキリスト像の先住民化など、目まぐるしい変化を迎えた。アラントラ民族のキリスト教化の歴史は、まだわずかな先行研究しかないが、シュトレロー牧師親子の研究や、初期アラントラ宣教師の研究が開始されている。そこからキリスト教化した